

ほと、ぎす名をもくもるにあぐるかなとおほせられかけたりければ、よりまさる右のひざをつき、ひだりの袖をひろげて、月をすこしそばめにかけつ、

ゆみはり月のいるにまかせて、とつかうまつり、御けんを給はりてまかりいづ、

〔枕草子^七〕人のなぞく、あはせしける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらうく、しかりけるが、左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へなどのたのむるに、略 中 其日になりて、略 中 天にはりゆみといひ出たり、略 中 右の人をこに思ひて、うちわらひて、や、さらにゑらすと口引たれて、さるがふしかぐるに、敷させく、とてさ、せつ、略 下

〔倭名類聚抄^一景宿〕望月 釋名云、望月、和名 月大十六日、小十五日、日在東、月在西、遙相望也、

〔箋注倭名類聚抄^一景宿〕毛知豆岐用望月字、見萬葉集、按、毛知豆岐、滿月之義、略 中 按、說文、望、月滿與

日相望以朝君也、从月从臣、壬、壬朝廷也、又云、望、出亡在外、望其還也、从亡望省聲、二字不同、徐鍇

曰、望、作望、假借也、毛晃增韻亦云、望、經典通作望、

〔類聚名義抄^二肉〕扇、俗、扇字、モチツキ、〔同玉〕望、音同、望月、望、俗

〔下學集^上時節〕望月 十五月 モチツキ

〔和爾雅^一天文〕幾望也、出、易經、望、六日、望月、小十五日、望、モチツキ

〔日本釋名^一時節〕望、モチツキ もちはみつ也、もとみと通ず、十五夜の月まどかにしてみつるゆへ也、或云、月

まどかにして、もちの形の如し、此説いか、

〔八雲御抄^三上象〕月略 中 もちづきは、十四五六日間也、但万には、十五日とかき

〔萬葉集^二挽歌〕明日香皇女木甍殯宮之時、柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌、略 中

鏡成雖見不厭三五月之益、目頰染所念之君、與時時幸而遊賜之、略 下

〔萬葉集^九挽歌〕詠勝鹿真間娘子歌一首并短歌、略 中